ざいちのち 56
実践型地域研究ニューズレター no.56，2013年6月
まちやむら，そこに住む人びと（＝ざいち）の，
知恵や生き方（＝ち）から学び，実践する活動です。
京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

朽木フィールドステーション

日本の焼畑におけるカブ栽培（その３）
－美山地区味見河内の事例－

京都学園大学バイオ環境学部　鈴木玲治

前回のニューズレター（54号）では、山形県鶴岡市温海地区一霞の焼畑によるカブ栽培の事例を紹介した。今回は、福井県福井市美山地区味見河内の事例を紹介する。

福井県美山地区味見河内
－縁起物としてのカブの衰退と外部者の関わり－

美山地区味見河内の焼畑で栽培される河内カブは、その鮮やかな紅色から正月料理の縁起物として重宝してきた。味見河内から峠を越えて大野市街の朝市まで運ばれた河内カブは未加工の状態で売られ、各家庭で甘酢漬けに加工されてきた。河内カブは歯ごたえに加え、独特の辛みと苦味があることが特徴である。近年では、正月の縁起物としてカブを食べる習慣が廃れてきており、河内カブの需要は低下しているが、現在でも未加工の状態で１玉100円程度の値がつくそうである。

写真１：福井焼き畑の会が2012年に開いた焼畑地での河内カブの収穫

味見河内の焼畑は基本的に雑木林を伐開・火入れしておこなうものであり、草地の焼畑はなかった。1980年代頃までの焼畑の輪作体系は、カブ（1年目）→アズキ（2年目）→ソバ（3年目）→アワ（4年目）→アズキ（5年目）などであり、15～20年程度の休閑期間が確保されていた。しかしながら、現在では休閑期間は3～5年程度に短縮されており、地力の低下を防ぐため、肥料に鶏糞などが使われている。

現在の味見河内では5世帯が焼畑によるカブの栽培を続けており、各世帯20～30万円程度の収入を焼畑から得ている。また、動物によるカブの被害はほとんどなく、獣害対策は全くいらない。これは、山北地区や温海地区の焼畑でも同様であり、イノシシ、シカ、サル対策のため、トタンと電柵を設置しなければならない余呉町の焼畑とは対照的であった。獣害対策にコストがかからないことは、これらの地域で焼畑によるカブ栽培を営み続ける上で、大きなメリットであるといえる。

写真２：収穫した河内カブ

また、味見河内では、「福井焼き畑の会」（以下、焼き畑の会）という、様々な職業の人々で構成されている有志の集まりが地元の土地を借り、20年以上にわたって焼畑による河内カブをつくり続けている。今回の味見河内訪問では、焼き畑の会が主催する収穫前夜祭にも参加させていただいた。前夜祭は、焼き畑の会と味見河内の農家の人々が交流を図る場として毎年行われおり、酒を飲み交わす皆さんの様子から、焼き畑の会の人々が地元と良好な関係を築き上げ、深い信頼関係にあることを感じた。しかしながら、玉井（2006）によれば、焼き畑の会の会員と地元農家が心を許して打ち解けるまでには５～６年の年月が必要であったという。焼き畑の会の人々は、地元の祭りにみこしの担ぎ手として参加したり、豪雨被害後に集落内の用水路の泥上げ作業に参加したりするなど、焼畑以外にも地域での地道な活動を積み上げており、そのことが今日の信頼関係の構築と焼畑実践の継続につながっている（玉井2006）。

焼き畑の会の人々は焼畑が好きで集まった有志であり、地域活性化などを主目的に活動を行ってきたわけではない。しかしながら、「好きでやっている焼畑」を20年以上にわたって地域と関わりながら続けてきたことが、結果的に焼畑を生業として営み続ける地元の人々にも活力を与えてきたように思われる。個人的な感想ではあるが、正月の縁起物としてのローカルなブランド力が徐々に衰退する中で、味見河内の人々が今日まで焼畑を続けられてきた要因のひとつに、焼き畑の会の存在があるように思う。我々の余呉町での今後の活動を考える上でも大いに参考になる、「福井焼き畑の会」の活動であった。

参考文献
玉井道敏（2006）「焼畑と赤カブ：福井市味見河内の焼畑による赤カブ栽培体験録」、みち第44号（あぜみちの会発行）

亀岡の農業と自然（１０）　畑の住人

京都学園大学　大西信弘

今年は、トノサマガエルを畑でたくさん見かけました。昨年も、２～３個体は見かけたと思うのですが、今年は、普通に見かけます。トノサマガエル（写真１）は、昨年（2012年）のレッドデータブックの見直しで、準絶滅危惧種に指定されたカエルです。新潟市内では、５年ぶりに再発見（毎日jp、2013年８月13日、地方版）と記事になっています。亀岡は、アユモドキが有名ですが、アユモドキだけが生き残っているのではなく、アユモドキも生き残ったくらい生き物達に住みやすい環境なので、今でも各地で絶滅したり、絶滅が危惧されるような生き物達が普通に暮らしているような状態です。トノサマガエルは、マルチシートに開けた穴から出入りしている個体がいました。アマガエル（写真２）は、畑に植えた作物を生活場所として活用しているようです。今年は、トノサマガエル、ヌマガエル、アマガエルが周辺で繁殖していたようで、夏には、小型の個体をたくさん見ることができました。

ちらっと見ただけなので、同定があやしいのですが、マルチシートの下から、尻尾の短いハタネズミが出てくるのもなんどか見ることができました。また、ハウスの周辺の人が踏み固めているところには、きれいにつくられた丸い穴があいています。これらは、ハンミョウの幼虫の巣（写真３）で、何ハンミョウかは同定していませんが、これらは肉食で、穴の近くを通りがかる昆虫などを食べています。成虫は地上で歩き回ったり、地表近くを飛んで移動したりしながら、昆虫などを捕まえて食べます。秋には、ハウスの周辺に大型のナガコガネグモ（写真４）がいくつも巣をかけていました。捕食者といえば、子どものころはカマキリをよく捕まえていましたが、畑ではカマキリはあまり見かけません。めずらしく、防虫ネットを徘徊するのは、チョウセンカマキリ（写真５）でしょうか？

チョウが舞っているというのは、いかにも自然豊かな感じですが、手放しで喜べるわけではありません。キャベツを作っているとモンシロチョウがやってきて、卵を産み、その幼虫がキャベツを食害します。農業塾でもよく見かけるキアゲハは、幼虫の食草がセリ科植物なので、ニンジン畑で時々見かけます。すいたん農業塾では、今年はニンジンをやっていないので、周囲に生えているセリ科の植物を食べて育ったのでしょうか。今年は、蛹化した個体（写真６）や、終令幼虫（写真７）を何度か見かけました。

なかなか数字ではっきりさせることは難しいのですが、今年の農業塾は、農薬を使うことがあまりありませんでした。使ったとしても、スポット的に散布しただけでした。害虫防除には、防虫ネット（写真８）を活用するといった対処もしました。防虫ネットをかけていないキャベツは、芯を残して柔らかい葉っぱが全部食べられてしまっています（写真９）から防虫ネットの効果は抜群です。防虫ネットの効果と言い切ることは難しいのですが、農薬を撒けば、害虫類の捕食者であるようなカエル類やクモ類にも影響はあるでしょう。また、害虫の捕食者の方が害虫よりも圧倒的に数が少ないので、多数いる害虫よりも先にいなくなってしまうかもしれません。土の中や茎、葉の中に潜り込んでいるような、農薬のターゲット達は、なかなか全滅させることは難しいのかもしれません。「生きもの共生」がわずかずつですが、実現しているのかなぁと感じられる一年でした。

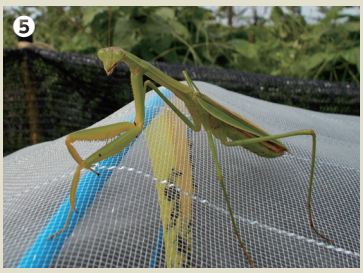

写真１　トノサマガエルは、畑をうろうろしている（2013.6.6 撮影）
写真２　枝豆の茂みの中のアマガエル（2013.10.17 撮影）
写真３　中央の丸い穴の中で頭だけ見えているハンミョウの幼虫（未同定、2013.9.22 撮影）
写真４　ナガコガネグモ（2013.9.14 撮影）
写真５　チョウセンカマキリ（2013.9.16 撮影）
写真６　キアゲハの蛹化した個体。残念ながら寄生されていたようで、次に見たときには死んでいた（2013.9.11 撮影）
写真７　キアゲハの終令幼虫（2013.10.17 撮影）
写真８　防虫ネットを張った畝（2013.4.14 撮影）
写真９　食害にあったキャベツ（2013.6.10 撮影）

南丹市美山町知井振興会・佐々里集落での ブータン研究者の PLA（参加型学習と実践）

愛媛大学大学院連合農学研究科　赤松芳郎

南丹市美山町佐々里集落を中心に除雪作業をしながら冬の農村生活を体験し、また過疎・高齢化の進む先進国日本の農村の現状を知ってもらおうという PLA プログラムが京都大学の地（知）の拠点事業（COC）の支援を受けて、ブータン王立大学シェラブツェ校、知井振興会、佐々里自治会、京大東南アジア研究所実践型地域研究推進室の協働によって２０１４年２月６日から１２日にかけて実施された。ブータン王国からは、シェラブツェ校で講師を務めるテンジン・デンドゥップさん（男性）とケンチョ・ペルゾムさん（女性）、そして同校の若い研究者であるタシ･ツォモさん（女性）とドルジ･ワンディさん（男性）が参加した。４人の出身地やブータン東部に位置するシェラブツェ校（標高１８００メートル）では積雪を見ることは稀であり、日常生活圏のなかで除雪はなかなか経験することができない作業である。また日本の農村を知ることで、近年農村部から都市部への移住者が急増し、特に空き家や耕作放棄地が増加しているブータン東部の農村地域の過疎化問題や開発を考える上でひとつの知見となることが期待される。こうして２月６日から佐々里の茅葺古民家で部屋を借り自炊をしながらの７日間にわたるブータン人４人の生活が始まった。シェラブツチェ大学に昨年 11 月までの二年間留学していた私はその調査時の通訳兼コーディネーターとして参加した。

佐々里集落は世帯数１２、集落人口２３人（平成２６年１月現在）、京都市内から車で約１時間半の丹波山地の山あいの小集落である。当初、リモート・ビレッジ（辺鄙なむら）での生活と聞いていた４人は車道から徒歩で山道を半日から１日かけて行く村を想像していたそうだ。近年急ピッチで道路建設が進んでいるブータンでもまだまだ車道の届かない集落が多い。滞在中２日間は京都市内の大学生を中心としたワークキャンプ・グループの除雪活動と地域交流会に参加させて頂いた。除雪作業をおこないながら佐々里集落では４世帯５人の方にお話を伺うことができた。５人の平均年齢はブータンの平均寿命を上回る６９歳であった（ブータンの平均寿命は２０１１年時点で６７歳）。４名のブータンの方々は佐々里の高齢者の人達がとても若く見え、非常に活動的であると驚いていた。日差しの強いヒマラヤ山脈南斜面での野外作業により黒く日焼けした肌とこれまでの重労働が顔や姿勢に現れたブータンの人は年齢以上に老けて見えることも多い。ブータンでは子供たちが独立し年老いてきたと感じた人達は自ら仕事から退き、数珠やマニ車を回しながら家の中で多くの時間を過ごすようになる。高齢にもかかわらず健康なうちは積極的に友人の家へ出かけ、早朝から除雪をおこない、田畑を耕す佐々里の人達は籠りがちなブータンの老人に比べて対照に映ったようである。佐々里には高齢一人住まいの家が３世帯ある。ブータンの４名の方々は、何故子供たちと一緒に暮らさないのかということを非常に不思議がった。ブータンでは高齢者夫婦の２人が農村で生活しているということはあるが、夫婦のうちどちらか一方が亡くなると残りの親は子供が必ず引き取っていく。道路や水道を含めたインフラの整備がまだ十分におこなわれていない田舎での高齢者一人暮らしが困難であるということもあるが、それ以前に親の面倒・世話は子供がおこなうのが当然であるという考えがブータンでは非常に根強い。一方でこのことが現在ブータンの農村部で空き家が増加する一つの要因のようだ。

７日間と短い農村滞在期間ではあったが、ブータンとは異なる農村文化に触れた中で自国の文化を再認識するとともに、戦後、日本が辿った開発・発展の良い部分と切り捨ててきた部分を認識し、今後のブータン王国の進む道を考えるきっかけとしてくれることを願う。

写真：佐々里集落でのブータンの方々と筆者の除雪作業
（撮影：安藤和雄 2014 年 2 月 10 日）

催しのご案内

■京都大学生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
京滋 FS 事業　第 57 回　実践型地域研究　定例研究会
日時　2013 年 6 月 28 日（金）　17：00 ～ 19：00
場所　京都大学東南アジア研究所稲盛記念館２階東南亭
発表者　矢嶋吉司　京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室研究員
内容　発表タイトル「ラオス国立大学農学部との協働による農村開発アクション・プラン」
★以上の催し物への参加ご希望の方は，必ずご連絡ください。
京都大学　東南アジア研究所　実践型地域研究推進室
担当：安藤和雄（ando@cseas.kyoto-u.ac.jp）まで。

西スマトラは伝統的なイカンラランアン

総合地球環境学研究所　アミ・アミナ・ムティア

琵琶湖では禁漁期間があります。これはアユやニゴロブナ・ホンモロコの産卵繁殖時期です。滋賀県は水産資源保護法に基づき、保護水面に指定しています（滋賀県漁業調整規則第 35 条の 2）。

インドネシアの西スマトラでは禁漁期間は法律で規定するのはなく、伝統的な方法によっています。その方法は、イカンラランアンです[1]（写真 1）。イカンラランアンの場所は川のあちこちにあります、特に川底です。いくつかのイカンラランアンの有名な場所を紹介します。

Pasaman（パサマン）県パサマン郡の Lubuak Landua（ルブアクランデュア）村にあるイカンラランアンは数百年の歴史があります。このイカンラランアンは Batang Luan（バタンルアン）川のそばにある小さいなモスク（スラウ）ルブアクランデュアと同じくらいの歴史があります。そこの魚は Gariang （ガリアン、*Tor tambroides*）です。餌を与えることは可能だが、魚を獲ることは禁止です。昔、イカンラランアンが決められるとき、Dukun（シャーマン）が魔法をかけ、その魚を獲った人は病気になったり死んでしまった事がありました。今日、その魚を守る目的は、魚の水産資源や環境の保全です。川がきれいになり、地域の観光スポットになっています。

Koto XI（コトスブラス）郡 Talawi（タラウィ）村は、イカンラランアンのおかげで沢山の大きな魚が見られます。住民の話によると、夜になるとその魚の姿が消えます。禁漁を破った人は、罰として 100 袋のセメントを差し出さなければなりません。毎年、漁が解禁になるときには、釣り大会が開催されます。一匹 2 キロを超える魚を獲ったらプレゼントがもらえます。なんと、バイク、冷蔵庫、テレビ等がもらえるのですが、実際はほとんど誰も獲ることができないのです。

写真 1　イカンラランアンにいるガリアン

Janiah（ジャニア）川にはイカンラランアンの言い伝えがあります。メラピ山の近くの Baso（バソ）郡の住民たちは居住地が手狭になり、別の場所を探していました。ジャニア川近くのその場所には妖精が住んでいました。そこで、妖精と住民たちは約束を作りました。住民が木を伐採する時に必ず、木の切れ端は木の倒れた方向に捨てなければならない、という約束でした。約束を守らないと、住民も妖精やその子孫が藻しか食べられなくなり、陸上に住むことができず、水中で生きなければならなくなるのです。ある日、住民が村役場を作るために森に出て木を伐りました。でも、とても疲れ、妖精との約束を忘れてしまいました。すると妖精たちがとても怒り、Batanjua（バタンジュア）丘から石を落とし、地震が起きました。住民はその事をまだ気づきませんでした。ある日 Datuak Rajo Nando（ダトゥック・ラジョ・ナンド）夫婦が 8 か月の赤ちゃんを家に置いたまま森に出かけました。家に帰るとその赤ちゃんがいなくなってしまい、どこを探しても見つかりません。しばらくすると、夢をみました。赤ちゃんはもう魚になったのでジャニア川でごはんをあげるようにと命令されました。次の朝、ジャニア川に行きご飯をあげて、声をかけると、二匹の魚が出てきました。一匹はとてもはっきり見えたので普通の魚です。もう一匹は、よく見えません。よく見える魚は人間の赤ちゃんの生まれ変わりで、もう一匹の魚は妖精の生まれ変わりにちがいないと、住民たちは信じました。

このようにインドネシアでは、法律によらない魚や自然を守るための慣習や伝説が沢山あり、今日の生態系維持に寄与しています。

[1] イカン（ikan）は魚、ラランアン（larangan）は禁止を意味する。イカンラランアンとは、ある期間、魚を獲ることを禁止することである。

発行：〒 606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/
編集：安藤和雄・鈴木玲治・大西信弘・小野寺佑紀